

語る

人生の贈りもの

若い力、古い力一緒に始めよう

《「最後の読書」「百歳までの読書術」などのエッセー・評論で、軽やかに本の森へといざなう87歳。最新作「生きるための読書」は伊藤亜紗、森田真生、千葉雅也、斎藤幸平ら各氏の若い知性に挑んだ》

冒頭、「老人でいるのに飽きたよ」と書いた。あれはね、最近もの忘れや昔の本を読み返す話をするが増えてたから。若い人の本は正直避けてきたけど、いざ読んでみて驚いた。みなさん大学の秀才たちなのに威張らない。新しい問題を大学内だけでなく日常の生活の中で考えていく。頭だけでなく身体でも考える。おれたち昭和の時代

評論家・編集者

津野 海太郎

①

とは学問の気風が変わったのだ
なと思いましたよ。

《1970年代まで編集とア



読むこと・書くことの意味が問
い直されている時代をみつめる
Ⅱさいたま市、篠田英美撮影

ングラ演劇の世界を行き来し、
「レジェンド」と呼ばれること
も。80年前後からはミニコミ、
コンピューター、エッセーに人
物評伝と活動の場を広げた》

我ながら、あきれるほどせわ
しない、とっ散らかった人生を
送ってきた。どんな領域でも、
自分にはない力の持ち主だと思
ったら、一緒になにか始めてし
まう。当時の言葉でいえば「運
動」ね。文学運動とか学生運動
とか。昔は普通だったけど、いま
はない生き方かもしれないな。

《手がけた本や雑誌作りの軌
跡をたどる「編集の提案」も注
目された。企画は50歳近く下の
フリー編集者、宮田文久さん》

インターネット時代の若い人
が昔の文章を集めていい本を作
ってくれた。インタビュの話
を書き言葉に変身させる作業は
「ある種の演出家」だと書いた
小文「テープおこしの宇宙」と
か。老いた自分が不意に生き返
ったようで、うれしかったな。

老人が若い力を見つけ、若い
人が古い力を掘り起こす。そう
いう関係が、もっと広がればい
いのね。

(聞き手・藤生京子) Ⅱ全14回

つのかいたろう 1938年生
まれ。劇団黒テント演出、晶文社
取締役、「季刊・本とコンピューター」
総合編集長、和光大教授など歴任。

五口る

人生の贈りもの

大作家も「さん」づけ 編集の道へ

《1961年、草間暉雄さんの劇団「独立劇場」に参加》

私は中ぶらり人だけど、草間は本気で演劇を目指していた。

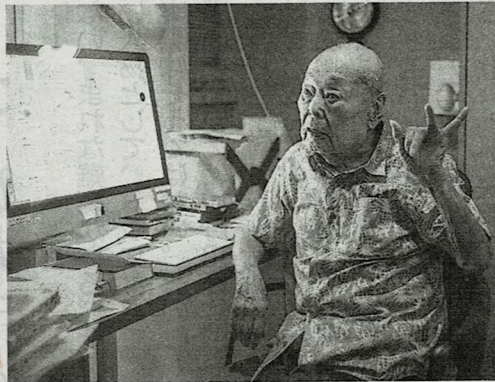
早稲田の鈴木忠志、明治の大鶴義英（のちの唐十郎）など、当時の学生演劇は力があり、草間もその一人。つながりもあり、彼ら同様、自分の劇団を組織するつもりだった。だが設立後に持病を悪化させて25歳で亡くなる。私も演劇から離れた。

《卒業後、アルバイト生活を経て「新日本文学」編集部員に補欠で採用される》

敗戦後、中野重治や花田清輝や安部公房らが組織した左翼系の文化運動ですね。戦中戦後を

評論家・編集者

津野 海太郎



「でかすぎる作家たち到场違いな若造がまぎれこんだ感じ」とかけだし時代を懐かしむ＝篠田英美撮影

生き抜いた有名人たちを自分の目で見たい。そういう興味が働いたのも事実だった。

私が入る前、新日本文学会を支配していた共産党との関係が崩れメディアも大きく報じた。で、編集部もノンポリ青年の私などを採用したのかもしれない。東中野の古い建物にあった編集部は自由な雰囲気だね。どんな大作家も「先生」と呼ぶ必要はない。ただの「さん」づけでいい。月に1度の編集会議も楽しかった。シベリア帰りの作家、長谷川四郎さんなど、どんなに議論が緊迫しても、「ノー、ノー」と小声でつぶやくだけ。味があつたな。みんな独立独歩の人たちだった。

つまり普通の文学雑誌とはだいぶ違う感じだったので、

編集の基礎はここで身につけることができた。野間宏さんの文章の間違いを勝手に直してしまつた時には、「ちゃんと断つてやれよ」と先輩の笠啓一さんに注意されたりさ。

忘れられないのは共産党との決裂が決定的になった64年の新日本文学会第11回大会。録音テープから私がまとめた原稿と発言が違うのではないかと、文芸批評家の本多秋五さんが言ってきた。あわててテープを送ると、こんな雑な発言をよくもわかりやすく整理してくれたと、逆にほめられた。うれしかったですよ。まだ新米の編集者だったのだから。（聞き手・藤生亨子）

◆次回は来週月曜日に掲載します。

五口る

人生の贈りもの

怒れる若者たち 息づかいの結晶

「新日本文学」会員で晶文社の小野二郎さんに誘われ、1963年末から同社でも働く

小野さんは私の9歳上。東大を出て弘文堂で谷川雁「原点が存在する」などを編集した後、友人の中村勝哉さんと会社を立ち上げた。ウィリアム・モリスの研究者でもあった。たぶん若い世代の、少し野蛮なセンスの人間を探してたのだろうな。

そこで私が最初につくった本が、英国の若い劇作家ウェスカーの戯曲。木村光一訳の三部作で「晶文選書」というシリーズを始めた。英国労働者階級の「怒れる若者たち」の息づかいを20代の一人として伝えたかった。

評論家・編集者

津野 海太郎

6

表紙はね、稽古場のウェスカーたちの、横長のモノクロ写真をタテに配置した大胆なもので、平野甲賀の装丁がカッコいいと評判になった。平野は私と同じ年、草間（暉雄）の遺稿集を出したとき以来のつきあい。

本は化粧より中身が大切、という出版界の常識を壊してみた。そんな気持ちもあった。平野はその後もしばらく、晶文社のほとんどの本を装丁する。《長田弘さんとも机を並べた》

私と違って、

長田は歴史ある美術系出版社で鍛えられた優秀な編集者だった。偏屈な男で、よくケンカもしたが、東中野の同じアパートで暮らすほど仲よくつきあった。

（聞き手・藤生京子）

最初に編集を担当したA・ウェスカー「ウェスカー三部作」II世田谷美術館提供



ウェスカー三部作 the weaker trilogy
A・ウェスカー 木村光一訳 晶文選書

つのかいたろう 1938年生まれ。著書に「読書欲・編集欲」「おかしい時代」など。

「ひとりもの」やめた楽しい新生活

《1993年、55歳で初めて個人的な生活を記したエッセー「歩くひとりもの」が評判に》

「思想の科学」編集委員だった黒川創に、そろそろ自分の暮らしのことは書いてみたら、と勧められた。そこで、もう50代になるといふのに結婚もせず、このまま老いていくにちがいない「ひとりもの」の日々について書くことにした。

いや、それまでも親しい女友達は何人かいたのですよ。でもあまりにも忙し過ぎたからね。学生時代とさほど変わらない、赤いギンガムチェックのシャツに短パン姿で人に会い、ひたすら歩きながら本を読む生活を送

評論家・編集者

津野 海太郎

12

っていた。いわば「だらだらと習慣化したひとりもの」だったのです。



親しい人たちに囲まれて。中央が津野さん。向かって左が妻の鈴木百合子さん。2024年、本人提供

《ところが本を出して2年後、知りあいの編集者・鈴木百合子さんと暮らし始め、結婚》みなさん、びっくりしたようだった。知らない女性から路上で「歩く裏切り者！」と小声でささやかれたりさ。

妻には小3の娘がいたので、荻窪のアパートで3人の生活が始まった。私にとってはまったく別の暮らしが新鮮だったし、楽しかったな。それまでは先のことなど、なに一つ考えなかったのに、結婚した途端、なんとか金を稼いで元気でいなければならない、といったことを考えるようになった。

《家庭をもって徐々に気づく

のは自身の家族の影響だった》最初のほうでお話したように父は若い人たちに親切な人で、転職先の会社でも女工さんたちの自立を支援していた。そのため「婦人之友」の熱心な読者会員だった母とともに、小さな英会話の本をつくるとかね。

そういえば、早く亡くなった妹も吉祥寺でふだん着のブティックをやっていた。彼女も母親同様、近所の人たちとのつながりを大事にしていたな。

それで気がついたが、私が大勢の人たちと「運動」を続けたのも、ひとつにはそんな家族の中で育ったからなのでしょう。

(聞き手・藤生亨子)

星座をつくりたい編集者の自覚

《2000年、和光大学教授。図書館長を務めた》

いろいろやりましたよ。大学図書館の本を地域に開放するとか、学生たちに欲しい本を選んで買わせるとかね。1990年代末に「新・本とつきあう法」という新書で、かたい本をありがたがる教養主義ではなく、もっとひろい気分で本を読む仕方を提案した。その続きですね。

評論家・編集者

津野 海太郎

13



長年の友人たちと。(右から)黒川創さん、高橋悠治さん、津野さん、松田哲夫さん
＝2020年、津野さん提供

同保存するNPOに参加するようになった。図書館は市場に左右される書店とは違う。売れる

本も売れない本も、同じように大切に扱わなければ。そんな原則がどんどん崩れていつていてほしい。残念ながらね。

《09年、70歳で定年。書きたかった本の執筆に専念する》

暇ができたので、これまで影響を受けてきた人たちの評伝を書きことにした。坪内逍遙、植草甚一、花森安治など。あとは「最後の読書」のような「老人読書」のエッセーを書きつき、それが87歳の現在まで続いています。

《評論家と名乗る機会が増えたが「本質は編集者」と語る》

それは老人になってはじめて自覚するようになったことね。

私にあるのは、自分にはない才能を持った人たちといっしょに働きたいという気持ちだけ。好きな人々が正當に認められてほしい。だから頼まれなくてもあちこちから作品を集め、組み合わせを考える。おせっかい、それが編集者というものであつて、つまり好きな人たちの「星座」をつくりたかったのですよ。

でも本は編集者のものじゃない。あくまでも著者のもの。私の場合、著者との関係は案外、冷淡で距離をおいていた。そういう人間が星々のつくる星座の中に入れてもらう。だいたい、そんな感じだったんじゃないかな。

(聞き手・藤生京子)

語る

——人生の贈りもの——

世界への抵抗 小さな場所から

「この10年、けがと病が絶えない。杖と妻の力を借りる」

少年の頃から習慣だった、「歩きながらの読書」が70歳過ぎで難しくなった。でも本との付き合いは衰えていません。昼も夜も、ベッドの上に本を山のように積み、弱った目で読む。入院先でも。できれば最後までこの状態が続けばいいのだが。友人がどんどん亡くなっていく。斎藤晴彦の翌年に鶴見俊輔さん。ずっと年下の加藤典洋や坪内祐三も。わずかに生き残っている昔の仲間、たとえば佐藤信や鎌田慧や萩野正昭など、会おう会おうと言ってはいるが、なかなかね。

評論家・編集者

津野 海太郎

14



「統合を目指さず、それぞれのやり方で自由にやればいい」＝篠田英美撮影

「7月に初孫誕生。喜びの一方で、世の風潮が気にかかる」戦争や政治や経済もだが、温暖化や大地震や山火事など、地球そのものもつのかどうか。孫を見ていると、心配になる。21世紀になった頃、世の中の雰囲気が変わったと感じました。私が若い頃は「大きいことはいいいことだ」という世の中の

空気にやせ我慢でもあらがって、しにせの出版社や劇団に背を向けた。今はそういう抵抗の気風が薄れたんじゃないか。インターネットだって、最初は個人の可能性を広げていたのに、巨大企業に支配されている。《それでも、若い世代に関心を寄せ、希望を見いだす》「どっちかといえば小さいほ

うがいい」という空気も、同時に広がっている気がする。独立系書店も増えたし、若い人たちが都会や大きな組織を離れ、新生活を始めているでしょう。

その昔、1970年代に鶴見さんが「方法としてのアナキズム」という文章を書いた。大きな世界や大きな権力を離れ、それぞれが自分たちの「小さな場所」で生きていく。生きる楽しみを味わいながらね。

いま若い人たちが新しい生活を楽しむのも、そのアナキズムの一種なのかもしれませんね。

（聞き手・藤生京子）おわり
◆次回作曲家の坂田晃一さんです。